

# □ 第9回静岡国際 オペラコンクール

## 大 坪 盛

静岡県に生まれ、日本が生んだ初めてとも言える世界的なプリマドンナである三浦環（1884～1946）の没後50年を記念して、1996年に創設され、以来3年毎に開催されている「静岡国際オペラコンクール」(Mt. Fuji International Opera Competition of Shizuoka) が開催された。因みに2023年はコンクールの欧文名にも記されている富士山が世界文化遺産に登録されてから10周年の記念の年にも当たる。

また、このコンクールは、2003年に声楽分野としては、アジアで初めて「国際音楽コンクール世界連盟」に加盟が認められた日本で唯一の、オペラに特化したコンクールである。回を重ねて今回が第9回目となる。

このコンクールは、オペラ界、声楽界における有能な人材を発掘する事を主眼とするとともに、広く音楽文化の発展を願い、国際交流を通して内外との連携を深め、世界に広がる「静岡文化」を創造することを目的として創設されている。

2023年1月から参加者募集が開始され、33カ国1地域から271名の応募があった。その中から予備審査を経た60名が、10月28日～30日の第1次予選に臨み、自選曲1曲と、コンクールの選定曲から、当日審査委員会が指定する1曲の合計2曲のオペラ・アリアの歌唱で競った結果、11月1日～2日の第2次予選には、16人が進んだ。

第2次予選の形式は、このコンクールの独自性が発揮されるもので、「自選役」のオペラ全曲の中から、第1次予選通過後に審査委員会が指定する箇所を演奏する形式で、演技も含めて、オペラの実演に近い内容が要求される。これは幾つかのオペラのアリア、重唱の全てを深いところまで理解し、覚え込むことが要求されるもの。世界のオペラ・声楽コンクールの中でも特異な審査方式として知られている。

この難関をクリアーした6人が、高橋直史指揮東京交響楽団の伴奏で、自選曲1曲と選定曲から第2次予選通過後に審査委員会が指定する1曲の計2曲のオペラ・アリアを歌う本選に進んだ。結果は以下の通り。

- ♪第1位：パク・サムエル（バリトン、韓国、1992生）
- ♪第2位：パク・ジフン（テノール、韓国、1991年生）
- ♪第3位：キム・ジャングレ・ノア（バリトン、韓国、1994年生）
- ♪入選（演奏順）：伊藤尚人（バリトン、1997年生）、チョー・チャニ（バスバリトン、韓国、1992年生）、山下裕賀（メゾソプラノ、1992年生）
- ♪オーディエンス賞：キム・ジャングレ・ノア
- ♪三浦環特別賞：山下裕賀

第1位入賞者には賞金300万円、第2位入賞者には150万円、第3位入賞者には75万円が賞状、トロフィーと共に授与された。また、入選者には各40万円と賞状が、それぞれ授与された。

三浦環特別賞は、日本国籍所有者で将来性のある出場者に、技術力向上に必要な経費に対する助成金を授与するものである。

審査員は、三浦安浩（審査委員長代理、日本／演出家）、チェ・

サンホ（韓国／テノール）、ジョスリース・ディエンスト＝ブラディン（フランス／オペラ・コーチ）、デイヴィッド・ガウランド（イギリス／英国ロイヤル・オペラ、ジェット・パーカー・ヤング・アーティスト・プログラム芸術監督）、浜田理恵（日本／ソプラノ）、レノーレ・ローゼンバーク（アメリカ／元スポレート・フェスティバル音楽監督）の6人。当初予定されていた木村俊光、伊原直子、シェリル・ステューダー（アメリカ）は欠席した。

第1位となったパク・サムエルは第2次予選では、モーツァルト作曲「ドン・ジョヴァンニ」から、ドン・ジョヴァンニのアリア他を歌い演じたが、その歌唱や表現は、文字通り役に成りきった迫真の内容の演唱が光った。又、本選でのワグナー作曲「タンホイザー」からヴォルフガングの〈夕星の歌〉、ヴェルディ作曲「ファルスタッフ」からフォードの〈夢か現か〉においても、低音域から高音域までムラのない輝きのある、存在感溢れる歌唱は即舞台も可能かのような見事さであった。パク・サムエルは表彰式の挨拶で一言「神に感謝したい」と喜びを語った。

このコンクールの成功の立役者として第1次予選、第2次予選でピアノ伴奏を務めた星和代、石野真穂、岩渕慶子、木下志寿子、越知晴子の5人のピアニストの健闘を挙げたい。特に第2次予選では、重唱箇所と一緒に歌うなど、八面六臂の献身ぶり、コンテスタントも心強かっただろうと思われる。

コロナ禍のため、3年遅れで開催された今回、上位入賞を韓国勢が独占した。入賞者の今後の更なる研鑽を期待するとともに、世界に向けての飛躍を祈りたい。コンクールは次回記念すべき第10回の節目を迎える。更なる充実と発展を期待したい。会場はすべてアクティビティ浜松大ホール。